

## オーストラリアの子どもの日本語教育におけるファミリーリテラシー教育支援

奥村 恵子 (早稲田大学大学院日本語教育研究科)

### 1. 研究の目的

本研究では、オーストラリアに在住する日本語バックグラウンドスピーカー<sup>1)</sup>の子どもと保護者に焦点を当て、実践者によるファミリーリテラシー教育支援が日本語バックグラウンドスピーカーの家族の日本語教育への取り組みと子どもの日本語学習に与える影響について検証する。

### 2. 研究の背景と意義

オーストラリアをはじめ海外においては、これまで日本語バックグラウンドスピーカーに対する日本語教育は主に日本語補習校に委ねられてきた。しかし、補習校とは元来、短期海外滞在勤務者の子弟が帰国後問題なく日本の学校システムに適應できることを考慮して作られた学校である。補習校における教育内容は日本の学習指導要領に準拠した国語と算数教育であることがほとんどであり、学習者である日本語バックグラウンドスピーカーにその実践内容が適合しない場合、学年が進むにつれて日本語学習の継続が困難になり、途中で断念するケースも数多く見受けられる。しかしながら、海外では、子どもの日本語教育の場は補習校しかないと考える保護者が多く、特にバックグラウンドスピーカーの子どもたちを持つ保護者の間では補習校以外に子どもたちを通わせる「学校」がないということは悩みの種となっている。

このような中、実践者である教師が学習者であるバックグラウンドスピーカーの子どもたちの保護者に向けて明示的にファミリーリテラシー教育支援を行うことが、保護者が学校だけに依存せずに主体的に子どもの日本語教育に関わることの重要性を認識する機会となり、今後の日本語バックグラウンドスピー

カーに対する日本語教育のありかたに示唆を与えると考える。

### 3. 理論的枠組み

日本語バックグラウンドスピーカーが属する永住者家庭におけるファミリーリテラシーに関する理論的枠組みとして、宮崎 (2011) 市民リテラシーと汐見 (2010) のファミリーリテラシーを援用し、分析を行った。

宮崎は、市民リテラシーとは「市民が目標言語の外言的なインターアクション問題の解決に関わるだけではなく、共通の価値観を内言化し、社会で役割参加するプロトコルを設定する上で不可欠な公共的教養」であると述べているが、家族は市民の最小単位であるとするならば、親は子どもを学校に通わせるだけでなく、子どもに一番近い親こそが中心となって役割参加していくことが必要であると言換えることができる。

また、汐見はファミリーリテラシーについて、「家族が行う家事や育児、将来への蓄え、リフレッシュ活動、近所づきあいなどを、与えられた条件を生かして上手にこなす能力」であると述べているが、この中には子どもの学習計画や管理、支援なども含まれている。汐見はこの子どもの学習の支援は学校教育において行う必要があると述べているが、海外でバックグラウンドスピーカーの日本語教育を行う場合は、多くの保護者が日本語教育機関として選択している補習校でこの支援を行うことが望ましいと考えられる。

### 4. 先行研究

アメリカでは、「継承日本語教育」について特に補習校教育などに関連してよく取り上げられており、継承日本語教育の研究を行うグループも構築されているほど盛んに研究が行

われている。片岡 (2008) は、アメリカにおける年少者の継承日本語教育は、第一言語を学ぶ補習校教育でも第二言語を学ぶ日本語教育でもない継承語としての日本語教育として十分に学習者のニーズに合ったものではないことを指摘している。特に、子どもたちが補習校で一律に国語の教科書を与えられることで、内容が理解できないことに苦しんだり、下の学年の教材を与えられることで劣等感を持ったりすることの危険性について述べている。これはオーストラリアの日本語バックグラウンドスピーカーのための日本語教育の問題と同様のものである。オーストラリアでは外国語としての日本語教育及び研究が盛んであるが、これまでバックグラウンドスピーカーのための日本語教育に関する研究は非常に少なく、特に学習者を取り巻く家族に焦点を当てた研究は見られない。

#### 5. 研究方法

本研究では、オーストラリア、ビクトリア州の補習校での学習を小学校段階の途中で断念した 7 名の日本語バックグラウンドスピーカー児童に対し、1 年間、家族とともに学習できるスタイルの教材を与え、実践を行った。具体的には、インターネットなどを使用したり家族で話し合ったりしながら課題を遂行する自然科学に関する読み物の読解と、まとめ作業である。実践終了後、その学習過程で家庭ではどのように保護者と子どもたちが学習に取り組んでいたかについて、また、家族とともに学習していく中でどのような気づきがあったかについて子どもと保護者それぞれにインタビューを行った。また、このインタビューの内容に基づき、各家庭のケースをケーススタディーの分析方法を用いて分析、考察した。

#### 6. 結果と考察

日本語バックグラウンドスピーカーの子どもを持つ永住者家庭のファミリーリテラシー教育支援を焦点にあてた日本語教育実践を行

なうことにより、保護者は子どもへの具体的な支援の方法を知ることができるとともに、他の保護者たちと各家庭の取り組みについて共有する機会を持つようになったことが明らかになった。また、子ども自身は今何を学習しているか、今後、自分が何のために、どのようにして日本語学習を継続していくのかということが明確になり、今後の日本語学習に対する強い動機付けとなった。また、子どもたちの中には、以前は親のために学習していると答えていたが、将来のキャリアのために日本語を学ぶようになったと意識の変容を語る者も数名見られた。このように、ファミリーリテラシー教育支援を意識した実践を行った場合、保護者と教員 (支援者) と子どもの間のインターアクションが頻繁に起こることで連携システムが構築され、これまでの永住者家庭における日本語教育、日本語学習に対する漠然とした不安が解消され、高い教育効果を上げることにつながったと考えられる。

注)

1) 日本語バックグラウンドスピーカーとは、主にオーストラリアの教育現場で使用されている言葉である。州によって定義にばらつきがあるが、おおむね両親のどちらかに日本人を持つか、あるいは幼少期を日本で過ごしたことがある外国人など、家庭で日本語を使用する機会を持っている人のことを言う。

#### 【引用文献】

片岡裕子(2008)『アメリカで育つ日本の子どもたち—バイリンガルの光と影—』 明石書店 pp.12-27.

汐見稔幸 (2010)、「家庭教育指導からファミリー・リテラシー獲得支援へ」、教育展望 56(9),483, 教育調査研究所

宮崎里司 (2011)「市民リテラシーと日本語能力」、早稲田日本語教育学 (9), 93-98, 早稲田大学